

追悼 山田芳弘 前顧問

碌山美術館の精神を支えた

山田芳弘先生の死を悼む

公益財団法人碌山美術館 顧問 所 賛 太

山田芳弘氏略歴

昭和 八年二月二二日 梓川村梓に生まれる

二七年三月 松本深志高等学校卒業

三一年三月 信州大学教育学部卒業

三一年四月 西筑摩郡開田村立開田東小

学校教諭(以後長野県下小

中学校教諭)

六一年四月 大町市立常盤小学校教頭

六三年四月 穂高町立穂高中学校校長

平成 五年四月 財団法人碌山美術館理事

信濃教育会生涯学習セン

ター副所長

五年四月 財団法人碌山美術館監事

六年十月 梓川村教育委員

九年十月 梓川村教育長

一二年十月 梓川村教育委員長

一四年四月 財団法人碌山美術館館長代

理 一五年四月 財団法人碌山美術館館長

一七年四月 財団法人碌山美術館理事

一八年四月 財団法人碌山美術館理事長

二四年一月 文部科学省社会教育功勞

賞受賞

二五年三月 全日本中学校校長会表彰

二五年一月 長野県教育長表彰

二五年一月 日本博物館協会全国表彰

二六年六月 公益財団法人碌山美術館顧

問 賞受賞

令和 三年一月 瑞宝双光賞受賞



あまりにも突然の別れ

節分を過ぎたうらかな春日和の二月二一日午後、梓川のご自宅から先生のお嬢様の美香子様から「突然ですが父芳弘が先程息を引き取りました」とお電話があり、一瞬何のことか理解できず耳を疑い何度何度も聞き返しました。正に青天の霹靂でした。一月末に美術館の来年度の運営基本方針を検討する顧問会議で元気なお姿でお会いしたのに、わずか一月足らずで他界されるとは夢にも思いませんでした。心から敬愛する先生のご逝去をどう受け止めていいのか胸が押し潰されそうで脚がたがた震えました。まさかあの会議が先生とお会いできる最後の機会だったとは今でも信じられません。自宅で脚を骨折され、長い入院そして自宅療養や通院・通所によるリハビリを続けておいででした。久子奥様やお嬢様たちの介護でかなり回復され以前より却って体躯は引き締まり完全に元どおりの先生に戻られたと安堵していました。補助の杖をついてお出ででしたがそのお姿は凛とし矍鑠としていました。いつも通り筋の通ったお話ぶりは今ままで変わらず会議は無事に終わりました。もしかしたら先生は最後の生きる力を振り絞ってご参加されたのではないかと今は思います。

祭壇に手を合わせながら

翌二二日夕刻ご自宅でお通夜が営まれお参りさせて頂きました。柩に納められた先生のお顔は、お亡くなりになられたとは思えない安らかなお顔でした。気持ちよく午睡されているような、まるで生きていようなお顔で「ああよく眠った」と今にでも起きてくるような温かい慈愛に満ちたお顔が今でも思い出されます。苦しみのない人生を全うした満足げなお顔にさえ見えました。その額に手を触れるとドライアイスで冷たく冷やされており「ああ先生はお亡くなりになったんだあと改めて気づきました。柩の副葬品に久子奥様は愛読書を一緒にと懇願されました

が聞き入れてもらえず、手紙と碌山のスケッチや紅葉の碌山館などの写真教葉を入れることができませんでした。いかに先生が私たちの碌山美術館を愛していたかが伝わってきて胸が熱くなりました。

翌二三日夕刻には『J.A.あづみ虹のホールとよしな』で、先生の氏神である梓川の大宮熱田神宮山田宮司により神式でご葬儀が執り行われました。数百人の会葬者がお出でになりましたが、このコロナの時節柄、式には限られた四十名余が参列しました。祭壇には先生の普段通りのお優しい穏やかなお姿が掲げられ改めて黄泉の国へ旅立たれたと実感しました。弔辞では学校教育、社会教育の立場から先生の業績をお聞きしました。自分の知らなかった先生の業績に改めて頭の下がる思いでした。私は美術館の立場で読ませて頂きました。

義理の妹の山崎様によるオカリナとハーモニカのしんみりとした葬送曲の演奏も心にしみました。喪主の真美子様からのご挨拶で、今年の夏以来介護のために滞在していた美香子様が明日アメリカに帰国される前に、そして誕生日二二日の一日前に亡くなったことをお聞きして、先生は最期まで潔い生き方をされてきたように感じられました。それにしてもお亡くなりになって二日後の葬儀での焦瘦された久子奥様のご様子が心配でした。あの膨大な蔵書はどうされるのか余計なことが気掛かりです。この会葬御礼には今までの先生の生きざまが感じられました。

御会葬御礼

「お父さん今までありがとう お疲れ様でした」
部屋収まりきらないほどの沢山の蔵書に囲まれていた在りし日の父の姿を思い出します。若い頃から教育一筋に現場で教鞭を執りながら最後は校長として勤め上げた父。退職後、地域の教育長として、又碌山美術館の館長として励み 晩年まで教育文化の発展に尽力してきました。私たちには厳しい顔も見せていましたが、きつとそれも「我が子

には立派に育って欲しい」という深い愛情故のもの。孫達が生まれると尻尾を下げて顔を綻ばせ、優しい祖父の顔をしていたものです。そんな父の日々の癒やしといえ、お風呂。湯船に浸かり身体の芯から温まるのがささやかな楽しみでした。デイサービスに通う間は入浴もそちらで済ませていましたが、昨年末には「新年になった絶対家の風呂に入る」と宣言し、自宅での入浴を開始しました。

又、地域の教育を支えるために尽力した中で、気の合う仲間を見つけ、様々な趣味を楽しみつつ晩年を過ごしてきました。

長らく頑張ってくれた父に今は感謝と労いの気持ちでいっぱいです。温かなその面影を胸に、これからも家族一同歩んでまいります。父山田芳弘は昭和八年二月二十二日に生を受け、奇しくも一日ちがいの令和五年二月二十一日、満八十九歳にて生涯をとじました。生前心通わせ、支えて下さった皆様へ、深く感謝申し上げます。本日のご参列誠にありがとうございました。

令和五年二月二十三日

喪主 小林真美子
山田美香子
外 親戚一同

邂逅

私の教員の頃、先生は教育界の重鎮で仰ぎ見る存在でした。南安曇教育会長、校長会副会長という重責を負いつつ校長としての職務を全うするお姿を遠くから尊敬していました。職場も違ったこともあり言葉を交わすことは殆どありませんでした。直接お会いしご指導を受けたのは私が梓川中学校の教頭として勤務したときが始まりです。当時の中学校は、全国的にもそうでしたが荒れていました。我が校も例外ではなく校内暴

力や校内器物破損など手のつけられない状態でした。現役を退いた先生は請われて梓川村教育長として勤務されていて、お心を痛めて事が起こる度に学校を訪ねて頂きました。ガラス、ドア、照明器具など多く壊され被害は甚大なものでした。それでも先生は指導の不行き届き等を叱責したり責任を問う事なく、生徒や教職員は無事だったか怪我はなかったかと寄り添って指導して下さいました。そしていつも事の収まるのを長い目でじつと温かく見守って下さいました。「この先生の御恩は忘れてはならない、いつか御恩返しをしたいものだ」と固く心に誓いました。当時市町村教育長会議が上田であつて夕刻からの懇親会の時、学校が荒れていると緊急連絡が入り急遽ハイヤーで駆けつけて下さった事がありました。その時は口にも出しませんでしたが、最近になって「あの時のハイヤー代は懐に響いたよ」と笑いながらおっしゃいました。私は冷や汗がどっと流れました。

私が教員生活最後の年を迎えようとしていた平成一六年の暮れ、何度となく柳沢廣理事長から「新年度から美術館の館長を引き受けてくれないか」とお誘いがありました。その度に頑なにできませんとお断りしてきました。ある日理事長が山田先生を伴って拙宅までお越しになりました。その時の山田先生は体調を崩して顔色も悪く辛そうな様子でした。先生の口からも「私の後任として館長をお願いしたい」と頭を下げて頂きました。そのお姿を目の前にして御恩返しをするならこのときしかないと思ひ、自信は全くありませんでしたが快諾しました。もし梓川での出会いがなかったとしたら、拒み続けていただろうと思ひます。

トリオでの美術館運営

その後体調が回復され平成一七年から平成二五年までの九年と二ヶ月間は、理事長（代表理事）として一緒に仕事をさせて頂きました。忘れてはならないのは当時常務理事として活躍されていた故五十嵐久雄氏であります。五十嵐氏は令和元年一月に急逝されましたが、五十嵐氏

の企画推進力と山田先生のお人柄と優秀な学芸員や職員に支えられてどうにか私は館長の職を終えることができました。

平成一四年からは碌山美術館友の会会長として、今まであった碌山クラブと統合し『碌山芸術への敬愛』を旗印に会員を取りまとめ、会員の荻原守衛の顕彰、ボランティア活動、研修や相互の交流など積極的に取り組んで来られました。今も自由・平等・献身の精神は受け継がれています。

四季・碌山友の会（友の会だより巻頭のことば）

（友の会会長 山田芳弘 平成一五年三月）

樹々の芽吹く春には

「できる人が できる時に できることを」と

追慕し敬愛する友の会の誕生

心をつなぐ会だより『碌山』

ありし日をしのお「碌山ゆかりの地」ウォーキング

さわやかな風通る夏には

自販機によるコーヒーなれど

緑陰のベンチに憩い語らう

心癒す環境づくりにと

館内外の草刈り 石畳の敷設に汗を流す

蔦の色づく秋には

碌山の系譜につながる「喜多武四郎展」

黒光の劇鑑賞の旅と 実りの秋

やがて冬支度

館庭の落ち葉掃き・薪割り・歳末煤払い

木花咲く冬には

正月開館の遠来の客と挨拶を交わし

雪の朝にはロータリーで雪をとばす

グズベリーハウスでは薪ストーブの火が燃え

美術図録に目を落とす温もりのひととき

碌山にかかわることで 深まる敬慕

巡りくる四季折々に

先生の在任中は当館の運営上の大きな仕事がありました。企画展のなかでは『斎藤与里展』は今でも強く心に残っています。開館以来の宿願であった守衛や関連作家の作品保存に適した空調施設の整った収蔵庫と守衛の平面作品の展示棟の建設を実現すべくその用地確保を計画しました。穂高中学校東西分離による生徒数減に着目し、穂高東中学校の生徒駐車場と当館庭南側の一部を交換すべく交渉に移りました。幸いに当時の町長平林伊三郎氏は当館創立時の館長平林盛人町長のご子息であり当館理事ということもあってスムーズに進みました。山田先生は穂高中学校在任当時よりお心を痛めていた生徒の登下校の安全を美術館側に歩道をつけるということにより解消し、今では安全な歩道として生徒はもとより地域住民が快適に利用しています。

現在は碌山公園となっている土地にスーパー建設の話が持ち上がり、文教地区に相応しい土地開発にも呼びかけて、公園そして文化施設としての研成ホール・駐車場になるよう粘り強い交渉もしていききました。

一九五八年に開館した当館は二〇〇八年に開館五〇周年を迎え『開館五〇周年イヤー』として年間通し様々なイベントが開催されました。記念式典の中で山田理事長の挨拶は格調高くその思いを切々と訴え参集者の心を打つものでありました。その後萩原守衛研究の集大成『萩原守衛作品集』『萩原守衛書簡集』『萩原守衛日記・論説集』の三部作は五十嵐常務理事を責任者に編集委員会を何度も開催しその刊行にこぎつけました。平成二五年より国の制度改革により当館は公益財団法人に移行しました。これにより運営は制約され、加えて入館者減少に伴って財政は

かなり逼迫してきました。減収を寄付で補おうと市内の事業所と一緒に回り、お願いしましたが経済低成長の時代でもあり成果が思うようには上がりませんでした。帰りの車の中で「考えてみれば教員は今まで人になかなか頭を下げてこなかったなあ」と先生とともに苦笑いしました。

その他の様々な活躍

後に社会教育で表彰されるなど、美術館以外でも多彩な活動をされました。信濃教育会生涯学習センターの実質的な責任者である副所長として四年間社会人の芸術文化活動をコーディネートし彫刻・絵画の制作、音楽、書道、郷土史などの講座を整備し生涯学習の環境を整えることに尽力されました。教員現役時代は郷土の先達の偉人である井口喜源治の研究・顕彰に資する『井口喜源治と研成義塾』の編集責任者の一人となり、このころ井口喜源治と碌山との関わりに強い興味を持たれたといえます。

穏やかでシャイなお人柄

よく館の職員に差し入れをして下さいました。それも恥ずかしそうな顔をして。拙宅に奥様が運転してみえた時、運転免許を取り上げられしまったと盛んに訴え、奥様との会話がまるで我がまま亭主とそれを諭す妻のやり取りのようで、本当に微笑ましかったです。そしてイタズラ坊主が自慢するように「新しい車のナンバーを私の誕生日の八年二月二日にちなんで「8222」にしてもらった」と童顔に戻り本当に楽しそうに話されました。そんな先生とはもう会えませんが、ご葬儀の後のあの久子奥様のお姿を思い出すと涙が止まりません。

教えて頂いたこと、ともに過ごしていただいた時間に感謝していますし、生涯忘れることはないでしょう。

先生、どうぞ安らかにお休み下さい。